

## 書評

A・コルバン、J・J・クルティエヌ、

G・ヴィガレロ 監修

『男らしさの危機?—二〇—二一世紀』

(藤原書店、二〇一七年)

内田 雅克

もはや、「滑稽」である。歴史的、可変的現象としての「男らしさ」—本書における「男らしさ」とは virilité であり、「男であること」masculinité とは区別される—は、執筆者四〇名の脱領域的知性と多様な専門性による精密な検証のなかで丸裸にされる。読者の眼前に現れる「男らしさ」の像は、歴史の消失の歴史を物語る。

本書評が対象とした第Ⅲ巻が扱う現代は、「男らしさ」を永続させる強力な装置や場、それらを補完する虚構は依然存在するものの、科学技術の発展と言説により「男らしさ」は弱体化され、境界が曖昧になった時代である。「男らしさ」の不安がいびつな「男らしさ」を発現させていく

様が、実に多角的な視点から鋭敏な分析によって描かれる。まず、各章を順に概観しておこう。

### 第Ⅰ部 「男性支配の起源、変容、瓦解」

クロディヌ・アロツシュによる第一章「男らしさの人類学—無力にたいする恐怖」は、男性支配の起源に着眼し、その出現に陰湿さを読み取っている。

男性の連帯は、孤立した個人であれば不安に思うかもしれない無力に対して、結束して集団的なかたまりとなることで対応しようとする方策であると看破し、「男は強くなければならず、それ以上に、自分が強いと示さねばならない」という強迫観念に取り憑かれた男たちが何にもまして恐れるのは、自分たちの傷つきやすさや無力さが暴かれることであると、その仮面を剥ぐのだ。

さらに本章は男性支配が辿る変容・瓦解の運命が、他者を肉体的あるいは心理的な弱者の位置に置く恣意性と不明確な差異による境界線の曖昧さに起因することを立証する。

第二章には、アンヌ・キャロル「医学と向かい合う男らしさ」が置かれる。

ホルモンと男性性への固執を、フォコネの言葉「男らしい男とは男性性器にもっとも似た男」に見出している。や

がてSRY(Y染色体領域性決定遺伝子)の自明性の陰り、性科学の「男らしさ」の構築への介入を経て、ついには勃起不全という現実を前に注射さらには錠剤へと依存していく男の「哀れ」な姿を映し出す。

そして「男らしさ」に関する偏狭な考え方、さらなる要求と広範囲に普及した不安のうえで、医学の二十世紀は閉じられたと結ぶ。

第3章「不安な男らしさ、暴力的な男らしさ」では、フアブリス・ヴィルジリが「男らしさ」と暴力との親密性を暴いていく。二十世紀の「男らしさ」の歴史において暴力は家父長的権力のための使用を正当化されてきたが、一九七〇年代以降法的にも社会的にも平等性は実現され、暴力的な「男らしさ」は「普通」ではなくなり、告訴され、議論され、有罪判決を下されるものとなったと歴史を読む。とはいえ、暴力はアイデンティティの指標を失った男たちが頼る「防衛的な男性性」であり、フェミニズムによる表面的な変化にも惑わされることなく、依然として数多存在しているのではないかという大きな疑問符を突き付けている。

クリステイヌ・バルは、第四章に「女性の鏡にうつる男らしさ」というタイトルを付し、「男らしさ」を纏う女性に視点を置く。男性性と「男らしさ」が分離可能であ

史苑(第七九卷第一号)

るということの後世に続く安定した証明としてジャンヌダルクを登場させ、さらに図版のポスター「We can do it!」に映る筋骨隆々の女性軍人に明快に実証させる。「男らしさ」を纏った女、さらに視界に入ってきたLGBT、クイアなどは、男の基盤を揺るがす脅威となり、もはやジェンダーは大きな亡霊として認知され、二元論的なものとしてはみなされなくなっているという。男なしの「男らしさ」が破壊力を持って二元的システムを脅かしていると、その動態を捉える。またその一方で「女らしさ」を求める言説がいまだなお散在している現実も見逃してはいない。

クリストファー・E・フォースの「英語圏の男性性と男らしさ」と題する第五章が、第I部を締めくくる。女性的なものを排除することによって形成される「男らしさ」が統制と支配に基づく社会構造へと組み込まれること、男性性のジェンダー、性、人種、階級という問題とも絡む必然性、そしてファシストに見られる男の不安の西洋とくにアメリカにおける現在進行形の拡大を指摘していく。

また同性愛の性に目を転じ、「男らしさ」の追求を自らに強く求めた中産階級によって差異の境界線が強く引き直されたことを、ジョージ・ジョンソン『ゲイ・ニューヨーク』を引用し説く。

## 第Ⅱ部 「男らしさの製造所」

第一章「ひとは男らしく生まれるのではない、男らしくなるのだ」、アルノー・ボーペローはボーボワールの言葉に応用する。

だが一方で、少年たちの社会化と教育に占める「男らしさ」のモデルが明白な矛盾を呈し始め、不確かな形象となり、その男性性はもはや支配の諸属性の所有を特徴としていない事実を指摘する。父性そのものが、「男らしさ」の標識として登場しなくなっているという。

第二章「描かれた男らしさと青少年文学」において、パスカル・オリーは日本のマンガに言及する。日本のマンガには読者と関連させるべき多種多様な「男らしい」人物像が創生され、さらに両義的な像が導入されていると分析する。

ステファヌ・オードワンルゾーの第三章「軍隊と戦争」は、軍隊の女性化に焦点を合わせる。

軍隊の女性化をあらたな位相の亀裂と解釈しながらも、性の障壁や排除が依然と残存し、もつとも明確に侵されているような紛争の中枢にいたつても遮断性を保ちつつげた事実を暴く。そして性同一性喪失を巡る最近の事例として、イラク人捕虜への米軍女性による虐待を挙げる。そこに「男らしさ」のアメリカ的なステレオタイプが再び支配的にな

ることへの困惑、現代社会のつなぎ目としての「男らしさ」を打倒することの困難性を見ている。

「スポーツの男らしさ」、この蜜月関係にメスを入れるのが第四章のジョルジュ・ヴィガレロである。スポーツの歴史によって「男らしさ」を巡るひとつの歴史が明らかにされる。

二十世紀はじめスポーツは完璧に磨き上げられた男の特性を想起させたが、その後の女子の台頭は力強い男子の資質とされてきたものが女子に共有されることを示し、避けがたい亀裂がもたらされたという。日本のアニメ『アタック・ユー!』、あるいはエレガントなベツカム選手によって、「男らしさ」と力を結び付けていた協定は、「女らしさ」と弱さをつなぐ協定を巻き込んで消え去ると、ミシエル・トゥルニエの言葉を引く。

その一方で、スポーツの「男らしさ」への固執は格闘技やラグビーにその居場所を見出しているが、神話的な必要性と老化は避けがたいと断じる。

第五章はドミニク・カリファ「犯罪者の男らしさ?」である。

仲間から男として認められる者は、「男らしさ」を証明する共通の特徴を有しているという。ひとつの知と、ひとつのモラルと、そしてあるひとつの女使用法とが交差する

地点に、ちんぴら、やくざ、ゴッドファーザーといった男の姿の出現を見る。

崇拜の対象である男たち、性的には支配されているが社会的には保護されて家事に従事する女、監獄の容赦ない性暴力にさらされる同性愛者―ジェンダーのヒエラルキーを犯罪者の顔に映す。

そして少数者、階級、人種、社会的地位のせいで機会を奪われている人たちが「不良の世界」の攻撃的な「男らしさ」に集団的な防衛手段を見出すという現実の脅威に警鐘を鳴らす。

### 第三部 「模範、モデル、反モデル」

冒頭に置かれるのは、第一章ジョアン・シャプト「ファシズムの男らしさ」である。

ファシストとは、絶対的な存在である男性であり、イタリアのファシズムとドイツのナチズムが見せた「男らしさ」は、第一次世界大戦の戦火と殺戮によって傷つけられた「男らしさ」を鍛えなおす機会を提供するものであったと解釈する。

第二章「労働者の男らしさ」では、テイエリー・ピオンがプロレタリアートの「男らしさ」に迫っていく。コミュニストとファシズムの表象は形式的には異なっているが、

「握った拳」をシンボルとする類縁性を有していること、そして「男らしさ」がエネルギー、秩序、権力、堅固さを表現するものであったことを指摘する。

一九五〇―一九六〇年代、労働者階級は価値観を根底から揺るがす変化を経験し、「男らしさ」と結びついた空間から遠ざかったという。技術の変化と男性社会の絆の弱体化を通じ、今日労働者の「男らしさ」の発現様態は、その正当性を確保できなくなっていると分析する。

シルヴァン・ヴネルによる第三章「冒険家の男らしさの曖昧さ」は、アバンチュリエが表象した「男らしさ」の変化を微細に描き出している。

そもそも冒険家の「男らしさ」は、社会の根底にあったその基準に対する拒絶を示していたという。二十世紀の偉大な冒険家によって筋肉の消失が「男らしさ」の消失を意味しなくなり、さらに冒険の女性化が到来したことから、冒険家の変容に「男らしさ」の歴史を重ねていく。

フロランス・タマーニユは第四章で「同性愛の変遷」を緻密に読み解く。

同性と性的関係を持つたり、恋愛関係にあったりする男性は、性行動ではなくジェンダーや性的役割によって定義されたという冒頭の指摘は、「男らしさ」と同性愛の微妙な関係を浮かび上がらせる。「女っぽい性的倒錯者」とい

うステレオタイプと短髪、ひげのクローン像を対比させる。

さらに同性愛はアラブ、アジアの植民地固有の悪徳であり、植民地化された人々は女性的と見なされるとい性性の構造の地政学的な変動に言及する。またゲイ文化の大衆文化への接近を見て取ることが可能であり、男性性の概念自体も絶え間なく再定義されている、と動態に目を凝らす。だが、男性支配が問い直されたり、同性愛嫌悪の暴力がなくなったりしたわけではないという現実をも同時に見据える。

第五章クリスタル・タロー「植民地および植民地以降の男らしさ」は、植民地現地人の獣のような「男らしさ」、BMC(戦地娼館)、そして二〇〇〇年代ポスト植民地における植民地時代の現地人の遺産の継承者ともいえるフランスの「ゴロツキ」へと目を転じていく。

#### 第四部 「イマージュ、ミラージュ、ファンタズム」

第一章は、ブルーノ・ナシム・アブドラ 「露出—裸にされた男らしさ」である。

男はファロスの卓越した象徴的秩序へ自分が生まれつき参加していることを、自分の解剖学上の性器から推論すると説く。男の解剖学的な性器、象徴的な性器、アイデンティティとの諸関係の複雑性を再発見する。レオナルド・ダ・

ヴィンチ「受肉せる天使」に、セクシュアリティをまぬが

れているような人間を再び見出したという欲望を読み取る。しかし、そこでもなお陰茎(勃起した性器)は持ち主の生命とは独立した固有の生命を授けられていると結ぶ。

第二章「映写—スクリーンにおける男らしさ」では、アントワーヌ・ド・ベックが映画のなかに「男らしさ」を追う。「男らしさ」をある歴史的な時期と社会的な空間のプンクックトウムと解釈する。

初期映画に男性の運動選手の身体誇示を見出し、ターザンに「遠国の男らしさ」とヒョウ柄の皮のパンツに秘められたエロスを見抜く。

西部人との決闘は「男らしさ」の頂点を極めたが、そこにも曖昧なヒーローの発明、その後の老衰・退廃といった消失の歴史を読み解く。その後の「よそ者」の格闘家ブルー・ス・リー、超人的なランボー、スーパーマン、ターミネーターへと変貌していく「男らしさ」の像を映し出す。

第三章、ジャン・ジャック・クルティース「文明のなかの巨漢—男らしさの神話と筋肉の力—」によって、膨大な本書は閉じられる。

「ペニスの黄昏」という悲哀に満ちたタイトルから始め、そこに多くの深刻な起源を見出していく。「男らしさ」、「男らしさ」の腐臭、数千年に及ぶ占有と虚栄、そして喪失へ

の恐れを見破る。「筋肉はもはや一方の性の特権でも、支配の印にもなりえない」、「老化、不能、死との戦いが「男らしさ」にとつての強迫観念となる」、「今や「男らしさ」は錠剤あるいは注射液として、販売されている」と、揺さぶられた「男らしさ」を炙り出す。

「男らしさ」の前提となる男性の力を不安定にする諸要素を懐胎するたびに、すなわち恒常的に、それは危機にさらされていると結んでいる。

緻密な例証と実証を通して、本書の書き手たちは「男らしさ」の対抗・拮抗・変容・瓦解の動態を描く。その勢いは終始弛むことを知らない。

「男らしさ」の仮面を容赦なく剥ぎ、ときには表面的な変化に惑わされず疑問符を投げかける。男なしの「男らしさ」の破壊力と「女らしさ」の要求を対立させる。そしてつねに現代の世界情勢を射程に入れ、アメリカでのファシスト的不安の拡大や社会的弱者の暴力性の肯定に警鐘を鳴らす。

図版の活用、フロイトなどの引用も論考に深みを与えている。なかでもレオナルド・ダ・ヴィンチ「受肉せる天使」は衝撃的である。また日本でも馴染みのあるターザンの分析は、殊更興味をそそる。結びの「ペニスの黄昏」は、「男

らしさ」のどこまでも滑稽で、そしてシリアスな姿を描いていよう。

全論考を通して日本との共通性も次々と現れ、文化・社会の垣根を越え、怒濤のごとく繰り出される論考にいつしか引き込まれていく。

その一方であくまで「西洋」を中心に据えているため、図版が助けになっても、芸術、映画などの馴染みの薄さが理解の妨げとなることも否めない。

また晦渋な日本語表現が散在するのは、こうした學術書では回避しえないものだろうか。暴力、戦争、性に纏わる「男らしさ」が実は極めて喫緊な問題であり、そして脅威であるという意識は一般には希薄であろう。だからこそ、こうしたテーマに対してより一般に、広範に関心を喚起することが望まれるのだ。その厚さを前にしただけでも、躊躇ってしまうかもしれない。著者たちの、そして訳者たちの労作が投げかけるメッセージが広く届く方法はないものだろうか。

「男らしさ」は、幾多の変貌を歴史のなかに見せながらも、私たちの身辺に出没することを止めない。その危険性は対となる弱者を必要とし、戦争を含む暴力を肯定するところにあるといえよう。

すなわち、それは現代の私たちにとつて深刻な問題であ

A・コルバン、J・J・クルティヌ、G・ヴィガレロ 監修『男らしさの危機? — 二〇—二二世紀』(内田)

るので。「西洋」の出来事ではないのである。こうした覚醒を促す本書の意義は疑い得ないだろう。

強く支配的な「男らしさ」に、弱く従属的な「女らしさ」を対置させる構図がもはや機能し得ないのが現在である。第Ⅲ巻最終頁で引用されたフロイトの言葉を、今ここに再び登場させたい。

「いつまでも喪の悲しみに暮れずに、みずから断ち切ったほうがよい」。

(東北芸術工科大学基盤教育センター教授)